全国編

防災・減災のページ

むすび塾

海水浴客の誘導も課題

南海トラフの避難対応

東日本大震災の教訓を地域の備えに生かすため、河北新報社は7日、巡回ワークショップ「むすび塾」を静岡県下田市の吉佐美（きさみ）地区で開いた。東北以外での開催は、海外を含め6回目。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、海水浴客らの避難対応などについて議論した。震災の被災者2人も「語り部」として参加した。

地区は南海トラフ巨大地震が起きた場合、10分程度で最大高さ25㍍前後の津波の到達が想定される。地元自治会は独自に地区の高台4カ所に避難場所を設け、階段や避難路を整備した。参加者から「地元のことだけを考えていてはいけない」との意見が出た。

下田市の沿岸部は吉佐美を含め、太平洋を一望できる観光地。民宿経営の鈴木みさをさん(64)は、宿泊客に必ず避難場所を教えている。ただ、静岡県は長い間、東海地震の発生が懸念される一方で、住民には津波の経験がない。「いざという時に、冷静に対応できるだろうか」と心配する。

地区内に海水浴場が3カ所もあるため、夏は首都圏からの行楽客でにぎわう。浜辺では、地震発生の際は監視員らが津波サインを掲げることを放送で呼び掛けている。市が避難所に指定する小学校は海抜4㍍で、水没の恐れもある。浸水想定域外の旅館やホテルなどで受け入れてもらえないか、地域では模索が続いている。

震災では宮城県南三陸町や気仙沼市などの高台にある宿泊施設が、避難所として被災者を受け入れた。木村理事長は「海の近くの宿泊客の受け入れも含めて、ぜひ関係者と対応を協議してほしい」と求めた。

一人で避難できない要援護者対策は、吉佐美でも深刻な問題だ。「限られた時間では、86歳の母を避難場所まで連れて行けるか」「高齢の母が車椅子の父を避難させられるだろうか」。参加者は悩みを打ち明けた。

木村理事長は、車椅子を人力車のようにして一人でも運びやすくする防災用品などを紹介し「最初から諦めてはいけないが、限界もある。どうするか、家族で決めるしかない」と助言する。

石巻市雄勝町で被災した主婦佐藤麻紀さん(41)は、病院に入院中の祖母と、助けに行った母を津波で亡くした。震災2日前の前震の後、父は母に「（次に大きな地震が来ても）助けに行くな。津波が来たらとにかく逃げろ」と話したという。

「ばあちゃんには申し訳ないが、犠牲を最小限に抑えるには、父の言う通りかもしれない。助けられなくても、罪悪感と考えないで」。遺族の言葉に参加者は聞き入った。

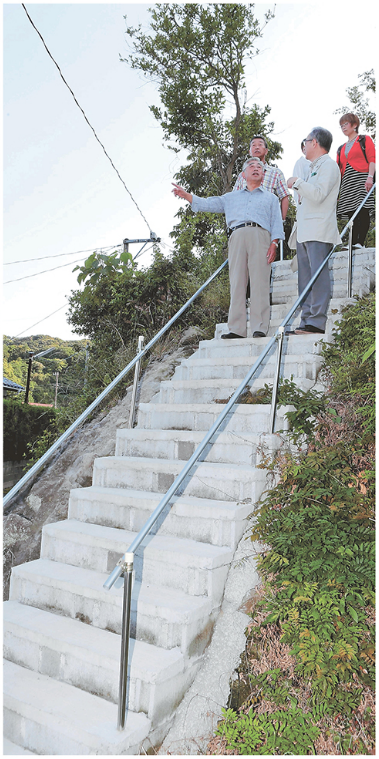
沿岸部の住民は「津波で自宅が流失する可能性があるのに、耐震化の必要があるだろうか」と迷いを口にした。

東松島市野蒜で建物ごと津波に流され、生還した水難学会指導員の安倍志摩子さん(51)＝大崎市＝は「地震で家が崩れれば、避難どころか外にすら出られなくなる」と話し、耐震化や家具の転倒防止策の大切さを強調した。

巡回ワークショップ　@静岡・下田市吉佐美

海水浴客の避難誘導や避難所の確保、要援護者対策について意見を交わす住民たち。地域の防災意識は高く、東日本大震災後、住民の手でコンクリート製の避難階段などを整備した

巡回ワークショップ
むすび塾



楠山俊介・下田市長

住民の意見交換大切

災害時の自助・共助・公助のうち、住民が担うのが自助と共助。今回のワークショップを見ていて、住民が活発に意見交換することで初めて地域の課題が整理され、行政が担うべき公助も見えてくると感じた。下田市は地震だけでなく、台風被害も受けてきた地域だ。住民同士が話し合う機会を大切にしたい。

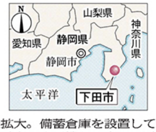
進士洋・吉佐美区長

食料の備蓄進めたい

語り部2人の恐ろしい体験に言葉がない。避難訓練にもっと真剣に取り組んでもらうよう、住民に呼び掛けたい。ワークショップの意見交換を踏まえ、食料の備蓄を進める。訪れる人たちの避難誘導や避難所の確保についても考えていく。

下田市吉佐美地区

住民が避難路を整備



下田市は伊豆半島の南部東側に位置する。約47㌔に及ぶ海岸線に、天城山系の南端から続く険しい山々が迫り、平地が少ない。気候は温暖で、水産と観光が盛ん。幕末にペリー提督率いる黒船艦隊が来航したことでも知られる。

吉佐美地区は人口約2000人。白浜が770㍍続く大浜をはじめ３カ所の海水浴場があり、首都圏から多くの観光客が訪れる。

地区中心にある朝日小（児童136人）は海抜４㍍、海から約500㍍の場所にある。防災教育に力を入れ、年間約10回の避難訓練を実施。６年生と保護者による夜間の避難訓練にも取り組む。

住民の防災意識も高い。朝日小の児童を含め200人が避難する予定の高台についても、住民が竹やぶを切り開き、避難場所を拡大。備蓄倉庫を設置して水や毛布、発電機を用意し、避難路に簡易の手すりを設けた。別の高台の避難場所には、コンクリートの階段を造った。

■むすび塾に参加して ―― 静岡・下田市吉佐美

【非常時の不安】地域で避難訓練をしているが、参加者が限られる。いざという時が心配だ。訓練も非常時もみんなで声掛けしたい。
＝下田市防災委員・笹本利市さん(64)

【参加して】津波はとにかく「逃げるが勝ち」だと思った。ただ、助かっても仮設住宅で亡くなる人もいる。残念だ。
＝下田市防災委員・進士八郎さん(65)

【非常時の不安】自宅が古い。地震で倒壊すると困るので建て替えを考えているが、津波で被害に遭うかもと思うと新築に踏み切れない。
＝民宿組合長・土屋隆義さん(65)

【参加して】語り部の話を聞き、非常時に自分がどんな行動を取れるか考えさせられた。避難訓練には参加していたが、真剣さが足りなかったかもしれない。
＝河井美津子さん(52)

【非常時の不安】近くの実家に住む父親は車椅子を使っている。老いた母親と2人で避難できるか、想像するとせつなくて涙が出る。
＝河井恵美子さん(56)

【非常時の不安】民宿を営んでいる。普段は宿泊客に緊急時の避難について説明しているが、いざというときに冷静に対応できるだろうか。
＝鈴木みさをさん(64)

【非常時の不安】高齢の母は一人では歩けない。最悪の場合はどうすべきか悩む。多くの人が同じように困っていると思う。
＝吉佐美区区長代理・進士里司さん(63)